

第三紀泥岩と影

—朔太郎の不安との類似性—

鈴木健司

一 イギリス海岸

随筆風の作品「イギリス海岸」は宮沢賢治の教師生活が下敷きとなっている。北上川の岸边をなす凝灰岩質泥岩がイギリス・ドーバー海峡の白亜層を想起させることから、賢治はそこをイギリス海岸（写真）と名付け、農学校の生徒を泳ぎに連れて行ったことが知られている。

この作品「イギリス海岸」では、クルミや偶蹄類の足跡の化石を発見したりする様子が、話の中心となっている。賢治は、午前中の農業実習の予定を書き入れた黒板に、括弧書きで「(午後イギリス海岸に於て第三紀偶蹄類の足跡標本を採取すべきにより希望者は参加すべし。)」と付け加える。そこにわれわれは、教師としての賢治のはつらつとした姿を読み取るであろう。

しかし、同時に賢治には次に示すような不安に満ちた「イギリス海岸の歌」というものもあり、イギリス海岸の二重性を見て取ることができる。

Tertiary the younger

Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

あをじろ日破れ あをじろ日破れ

あをじろ日破れに おれのかげ

Tertiary the younger

Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

なみはあをざめ 支流はそそぎ

たしかにここは修羅のなぎさ



写真提供 泉澤武男氏

「Tertiary」とは「新生代・第三紀」のことで、「the younger」は「第三

紀」のうちの「新第三紀」を意味している。賢治は、「Mud-stone」（泥岩）のできた地質時代を作品「イギリス海岸」で「第三紀の終わり頃、それは或は今から五六十年或は百万年を数へるかもしれません」と述べている。

賢治は、泥岩にうつる「おれのかげ」に目をやり、「たしかにここは修羅のなぎさ」と表す。では、「修羅」とはどのような意味で用いているのか。文語詩「〔川しろじろとまじはりて〕」が同趣の内容を扱っており、参考になる。

川しろじろとまじはりて、 うたかたしげきこのほとり、
病きつかれわが行けば、 そらのひかりぞ身を責むる。

宿世のくるみはんの毬、 干割れて青き泥岩に、
はかなきかなやわが影の、 卑しき鬼をうつすなり。

蒼茫として夏の風、 草のみどりをひるがへし、
ちらばる蘆のひら吹きて、 あやしき文字を織りなしぬ。

生きんに生きず死になんに、 得こそ死なれぬわが影を、
うら濁る水はてしなく、 さゝやきしげく洗ふなり。

泥岩にうつる「影」は「卑しき鬼」の姿であるという。「卑しき鬼」とは一種の自己規定であり、仏教思想に立てば、自己の本質ということにもなるだろう。また、詩「〔あかるいひるま〕」に、次のような詩句を見出すことができる。

聖者たちから直観され〔以下不明〕
古い十界の図式まで
科学がいまだに行きつかず
はっきり否定もできないうちに
たうたうおれも死ぬのかな
いま死ねば
いやしい鬼にうまれるだけだ

自己の来世を「いやしい鬼」と考えるのは、賢治の現世での自己規定が「いやしい鬼」だからである。それは、詩「春と修羅」（mental sketch

modified) で、「四月の気層のひかりの底を／唾し はぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」と自己規定する「修羅」と同義である。

詩「東岩手火山」にも、同様の表現を見出すことができる。

東は淀み
提灯はもとの火口の上に立つ
また口笛を吹いてゐる
わたくしも戻る
わたくしの影を見たのか提灯も戻る
（その影は鉄いろの背景の
ひとりの修羅に見える筈だ）

岩手山の地学的成立は、第四紀洪積世にあたる約三十万年前を起点とし、現在も活動中だが、「わたくしの影」が「（ひとりの修羅に見える筈だ）」と賢治が考える前提に、岩手山の成り立ちが、今から三十万年前にさかのぼるという地質年代的要素が意識されていたと思う。

つまり、賢治にとって地質年代的な過去とは、「影」というかたちで自己の本質が露わになる場所なのである。

二 朔太郎的不安と影

賢治が泥岩にうつる自己の「影」におびえる詩をつくる以前に、萩原朔太郎が、自己を犬に仮託し、自己の「影」におびえる姿を詩にあらわしている。『月に吠える』（大正6年）の「序」に

月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する犬の心に、月は青白い幽霊のやうな不吉の謎である。犬は遠吠えをする。

私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のあとを追つて来ないやうに。

詩「見知らぬ犬」（『月に吠える』）を読むと、朔太郎の不安が、自己の「影」として犬の姿に形象化されていることがよく理解される。

この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる、
みすばらしい、後足でびつこをひいてゐる不具^{かたわ}の犬のかげだ。

ああ、わたしはどこへ行くのか知らない、
わたしのゆく道路の方角では、
長屋の家根がべらべらと風にふかれてゐる、
道ばたの陰気な空地では、
ひからびた草の葉つばがしなしなとほそくうごいて居る。

ああ、わたしはどこへ行くのか知らない、
おほきな、いきもののやうな月が、ほんやりと行手に浮んでゐる、
さうして背後のさびしい往來では、
犬のほそながい尻尾の先が地べたの上をひきずつて居る。

ああ、どこまでも、どこまでも、
この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる、
きたならしい地べたを這ひまはつて、
わたしの背後で後足をひきずつてゐる病気の犬だ、
とほく、ながく、かなしげにおびえながら、
さびしい空の月に向つて遠白く吠えるふしあはせの犬のかげだ。

朔太郎の詩には仏教思想的要素がないので、賢治の詩に見られるような来世の問題に展開していくことはないが、「自分の影に怪しみ恐れ」る姿は、朔太郎の自己認識をよく示しており、その意味で、賢治の「影」意識は、朔太郎という先駆者をもつといえる。

朔太郎は自己を〈犬〉と規定し、賢治は〈修羅〉と規定した。

朔太郎と賢治の否定的な自己規定をさらに分析するなら、自己の消滅願望から、世界への一体感すなわち不死のイメージへと展開しており、その類似性も注目に値するといえるだろう。不安の増大化の果て、賢治は、

(まことのことばはここになく
修羅のなみだはつちにふる)

あたらしくそらに息つけば
ほの白く肺はちぢまり
(このからだそらのみぢんにちらばれ)

と自己の身体の消滅・微塵化、世界との一体化を希求することになるが、朔太郎にも、同様の衝動のあったことが「死なない蛸」という散文詩（『宿命』）に確認される。

或る水族館の水槽で、ひさしい間、飢ゑた蛸が飼はれてゐた。地下の薄暗い岩の影で、青ざめた玻璃天井の光線が、いつも悲しげに漂つてゐた。

だれも人人は、その薄暗い水槽を忘れてゐた。もう久しい以前に、蛸は死んだと思はれてゐた。そして腐つた海水だけが、埃つばい日ざしの中で、いつも硝子窓の槽にたまつてゐた。

けれども動物は死ななかつた。蛸は岩影にかくれて居たのだ。そして彼が目を覺した時、不幸な、忘れられた槽の中で、幾日も幾日も、おそろしい飢餓を忍ばねばならなかつた。どこにも餌食がなく、食物が全く盡きてしまつた時、彼は自分の足をもいで食つた。まづその一本を。それから次の一本を。それから、最後に、それがすっかりおしまひになつた時、今度は胴を裏がへして、内臓の一部を食ひはじめた。少しづつ他の一部から一部へと。順順に。

かくして蛸は、彼の身体全体を食ひつくしてしまつた。外皮から、脳髓から、胃袋から。どこもかしこも、すべて残る隈なく。完全に。

或る朝、ふと番人がそこに來た時、水槽の中は空つぽになつてゐた。曇つた埃つばい硝子の中で、藍色の透き通つた潮水と、なよなよした海藻とが動いてゐた。そしてどこの岩の隅隅にも、もはや生物の姿は見えなかつた。蛸は実際に、すっかり消滅してしまつたのである。

けれども蛸は死ななかつた。彼が消えてしまつた後ですらも、尚ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。古ぼけた、空つぽの、忘れられた水族館の槽の中で。永遠に——おそらくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。

賢治と朔太郎との違いといへば、賢治が自己消滅を世界との一体化という方向でベクトルの向きを転換させたのに対し、朔太郎は、あくまでも世界との対立という構図を手放さなかつた点である。

しかし、基本的には、他者・世界に対する孤立や苛立ちは、賢治の場合も朔太郎の場合も共通していると私はみる。それを賢治は「草地の黄金をすぎてくるもの／ことなくひとのかたちのもの／けらをまとひおれを見るその農夫／ほんたうにおれが見えるのか」と表現し、朔太郎は「けれども蛸は死な

なかつた。彼が消えてしまつた後ですらも、尚ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。—略— —おそらくは幾世紀の間を通じて—或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た」と表現したのである。

三 病む心

朔太郎が『月に吠える』で用いた素材は、きわめて病的なものである。

死

みつめる^{つち}土地の底から、
奇妙きてれつの手がでる、
足がでる、
くびがでしやばる、
諸君、
こいつはいつたい、
なんといふ^う驚鳥だい。
みつめる^{つち}土地の底から、
馬鹿づらをして、
手がでる、
足がでる、
くびがでしやばる

このような病的な素材は、宮沢賢治にもまた共通しており、童話の場合「鳥の北斗七星」の次のような箇所に見出される。

たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅がはひつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握んで空の天井の向ふ側へ持つて行かうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつつかり合ひます。

物語としては結局、「いや、ちがひました。／さうぢやありません。／月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登つてきたの

です。そこで鳥の軍隊はもうすっかり安心してしまひました」と何事もなかったかのように先に進んでいくのであるが、賢治が残した奇妙な絵（図）をみると、賢治の病的ともいえる神経が物語の背後に張り付いていることが理解されるのである。また、明治四四年（賢治一五歳）の短歌に「鳥の北斗七星」の素材にあたると推定される表現が記されており、賢治にとって思いつきに類する表現でないことも確認できる。

軸棒はひとばんなきぬ凍りしそら ピチとひびいらん微光の下に
凍りたるはがねのそらの傷口にとられじとなくよるのからすらなり
かたはなる月ほの青くのぼるときからすはさめてあやしみ啼けり

「そら」の「ひび」や「そらの傷口」といった表現、また「かたはなる月」など、絵（図）との共通性が明らかである。「鳥の北斗七星」では、そらの「裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて」と表現されているところは、絵（図）では逆に、裂けた地面から、〈あやしい長い腕〉が伸びだす構図となっている。どちらにしても、賢治は明治四四年当時、病的な幻覚体験をもっていたことを暗示している。同時期の短歌として、さらに、「あはれ見よ月光うつる山の雪は若き貴人の死蠟に似ずや」「わが爪に魔が入りてふりそそぎたる、月光むらさきにかゞやき出でぬ」「鉛などかしてふくむ月光の重きにひたる墓山の木々」など、〈月の光〉を病的ともいえる神経で描いている。

また「大正三年四月」の短歌には、「青いひしげた二十日の月」（「鳥の北斗七星」）にあたるような、異形の「月」が描写され、賢治はそれを「脳病」のせいだと記している。

われひとり
ねむられずねむられず
まよなかの窓にかゝるは
赭焦げの月

ゆがみひがみ
窓にかかれる赭こげの月
われひとりねむらず
げにものがなし



図

われ疾みて
かく見るならず
弦月よ
げに恐ろしきながけしきかな

星もなく
赤き弦月たゞひとり
窓を落ち行くはたゞごとにあらず

ちばしれる
ゆみはりの月
わが窓に
まよなかきたりて口をゆがむる

月は夜の
梢に落ちて見えざれど
その悪相はなほわれにあり

鳥さへも
いまは瞬かねば
ちばしれる
かの一つ目はそらを去りしか

わがあたま
ときどきわれに
ことなれる
つめたき天を見しみることあり

なにのために
ものをくふらむ
そらは熱病
馬はほふられわれは脳病

ぼんやりと脳もからだも
うす白く

消え行くことの近くあるらし

目は紅く
関節多き動物が
藻のごとく群れて脳をはねあるく

ものはみな
さかだちをせよ
そらはかく
曇りてわれの脳はいためる

引用が多数になったのは、それによって賢治にとっての〈幻視〉〈幻覚〉問題の大きさが測れると考えたからである。このような病的な神経は、朔太郎の詩にもよく見出すことができる。また、〈幻視〉〈幻覚〉の対象として、この時期、「空」や「月」が多いのも特徴的である。単純に、朔太郎との影響関係を想定することは危険だとしても、『月に吠える』自体「月」の語が用いられており、「いきもののやうな月」「さびしい空の月」などをはじめ、引用外の詩篇でも「月」の用例を多く数えることができる。朔太郎の描く「月」の特徴は、賢治の描く「月」と異なり、不安、恐怖の対象とはいえないが、かといって、崇高な「月」のイメージでないことも確かで、賢治が、朔太郎の一種異様な「月」に関心をもった可能性は高いと思う。

対馬美香の「宮沢賢治の絵画－萩原朔太郎『月に吠える』挿画の投影－」（『実践国文学』、第40号、平3・9）は、タイトルが示すとおり、宮沢賢治の絵画に、萩原朔太郎『月に吠える』挿画の投影をみようとする論だが、賢治と『月に吠える』との接点は、絵画のみではなく、「影」や「月」といった素材からあらためて見直すことができるように思う。賢治はいつ『月に吠える』を知ったのか、対馬が的確に記しているので引用させていただくと、

まず第一に、早く小倉豊文氏〔文献20〕が指摘したように、賢治の盛岡中学の同級生で当時東京帝国大学に在学中だった友人・阿部孝氏（一八九五―一九八六）の次の記述が重要と思われる〔文献21〕。

宮沢賢治が盛岡高等農林学校を卒業して、就職運動の代りに法華に凝り出し、田中智学を慕って東京へとび出して来た頃である。秋晴の日曜日だった。上野の奥の谷中墓地に近い素人下宿にくすぶる

文科大学生だった私の部屋へ、彼は飄然と姿をあらわしたのである。
(中略) 郷里のはなしも一通り出つくしてしまった時分、私のまずしい本箱の中から、彼は一冊の本を引っぱり出した。萩原朔太郎作「月に吠える」という詩集だった。
「ふしぎな詩だなあ」、そう言いながら彼は頁をめくっていった。
(中略) 頁をめくってゆくにつれて、賢治の目が異様な輝きを帯びてくるのを、私は見のがさなかった。「読むなら持って行っても好いよ」、私は無造作にそう言った。

この一文からすると、賢治が『月に吠える』にはじめて接したのは、国柱会の「田中智学を慕って東京へとび出して来た頃」—すなわち、大正一〇年の家出の年ということになる。しかし、この点について、小倉氏が阿部氏に確認を求めたところ、賢治が阿部宅を訪ねた可能性があるのは、大正七年十二月末から翌年二月初旬までであって、日本女子大学在学中の妹トシが病気で入院したため、その看護に上京していた期間中の記憶違いであることが判明した。結局、小倉氏は、諸々の理由から『月に吠える』と出会った時期を、大正八年一、二月頃と推定した(註)。

また、賢治の父・政次郎の従弟にあたり、賢治とは信仰を共にした関徳弥氏(一八九九—一九五七)も、その著述〔文献22〕の中で、

朔太郎には可成心を傾けて居られました。朔太郎の匂ひを一寸位感ずる事の出来る様な詩句を賢治氏のものに見出すことがあります。如何に賢治氏とてそういふ事もあってしかるべきだと考へます。

と、述べていることや、さらに同氏が小倉氏に次のように語ったことにも注目したい〔文献20〕。

(賢治は) たくさんの現代詩人の詩集をもっており、記憶しているものでは歴史家になった女流詩人高群逸技のものや、朔太郎の「月に吠える」などがあった(後略)

この二証言は、賢治が『月に吠える』に接したことを伝える阿部氏の一文の傍証となろう。

註

小沢俊郎氏〔文献27〕は、賢治の盛岡高農時代の同人誌「アザリア」第三号（大正六年十月刊）に載った同人の一人の評論「あざりあに表れたセンチメンタリズム」中に、『月に吠える』を読んでいなければ、あり得ないような言葉のもじりがあると指摘。従って、賢治もその頃から同詩作品についての一応の認識があったという推定もある。

引用文献

- 20小倉豊文「声聞縁覚録（五）、賢治と阿部孝さん（二）」『四次元』第182号・昭41（一九六六）
- 21阿部孝「或日の賢治」随筆甘口辛口、同学社・昭31（一九五六）
- 22関徳弥「賢治素描（八）」イーハトーヴォ第12号・昭ほ（一九四〇）
- 27小沢俊郎『小沢俊郎宮沢賢治論集 2 口語詩研究』有精堂・昭62（一九八七）

対馬論の判断にしたがい、朔太郎の『月に吠える』と賢治との出会いを小倉豊文の推定する「大正八年一、二月頃」とするなら、神経を病んだ経験をもつ賢治が、朔太郎の『月に吠える』に敏感に反応したことは、十分にうなずけることである。しかし、「大正一〇年」説の場合では、賢治がすでに童話群を書き出している可能性があり、そのような条件付の状況で『月に吠える』の影響を設定しても、賢治にとって本質的な影響があったと判断することはできないだろう。むしろ、賢治が、童話や詩を書き出す以前に『月に吠える』と出会い、〈病む心〉という共通性を見出したと仮定し、その後年月を経て、『月に吠える』の影響を賢治なりに受け止めた結果として、童話や詩が生まれてきたと考えたい。

四 〈病む心〉の行方

さて、朔太郎の病んだ神経は、「ある詩人へ送った手紙－詩集「月に吠える」の批評について返礼の書簡」（「ノート六」）に詳しく記されている。

私の詩に現はれた種々の幻覚（たとへば蜘蛛の巣だらけの顔や、曇ったガラスから見える歪んだ顔や、バクテリアの手足や、竹の繊毛）に就

いてあなたの言はれた言葉は真実です。此等のものはたしかに一時の肉体的疾患の副産物にしかすぎません。それは大した本質的の価値のないものです。併し私がどんなにこの神経質的憂鬱のなやましい拷問から逃れようとして苦しんだか。顔いちめんにかかつたあのねばねばした蜘蛛の巣をぬぐひとらうとしてどんなにうつつうしい苦悩の日をつづけたか。どんなに歪んだ顔や腰付のみにくい感覚が、どんなに私自身を臆病にして一室の中に閉ぢこめさせたか。そしてあの戦懐すべき死の幻覚！あの当時の悲しいやるせない苦悩を考えるといまでも涙が出るほど自分がいぢらしくなる。

朔太郎は、自己の詩に「種々の幻覚」の入っていることを認め、「一時の肉体的疾患の副産物にしかすぎません」と述べている。賢治もまた、大正一四年二月の森佐一宛書簡で、

スケッチ二篇お送りいたします。後の方だけ出して下さるならなほ結構です。幻聴や何かの入らないすなほなものを撰びました。

と記しており、このことは逆説的に、賢治の作品にも「幻聴や何か」が素材として入っていることを証している。

さらに重要なことは、朔太郎も賢治も、自己の〈病む心〉と向き合い、それをそれぞれの方途で乗り越えようとしている点である。

併しそれはあなたの言はれた通り、私のほんとの世界、ほんとに求めてゐる世界ではありません。むしろ、それは私の理想の世界とはよほど緑の遠いものでした。そしてあなたが言はれた通り「作者の真に求めてゐるものはその病める世界の底にあつた」のでした。

思ふに私のもつてゐるかうした悪魔的思想や感情の類が私自身の本質ではなく、言はば人格的概念ともいふべきものにすぎないやうに、あつた恐怖や幻覚の類も思ふに私自身の肉体の本質ではなく、その疾患の生んだ概念的感情にすぎないものにちがひありません。

もちろん私はさうしたものから一日も早く脱却して、「霊」の「生命」の純真な世界へ安住したいと念じて居ります。私の肉体が健全であるとき過去の病的な神経や幻覚が私から逃れてしまふやうに、私の思想が健康を回復するときに、いつさいのデカダンのなものや悪魔的なものは悉く私からはなれ去つて、私は心からの聖人になることができると思ひま

す。私は切に切にその日のくることを希望して居ります。

併し私は決して決してそれらの苦痛や誘惑から逃避しようとは思つて居りません。寧ろ私は進んでそれらの苦痛の淵や地獄の底へ身を投じてゐることに自ら誇を感じてゐます。私はかの「地獄の底に神を発見しようとする」ドストエフスキイの悲壮な努力に限りなき同情をもつことができます。私はすべての病めるもの、罪惡に悩めるもの、腐れたる良心のもの、またある特種な疾患と特異な性情とになやめるもの、苦しむもの、不しあはせなもの、ひねくれたものと一所に住んで、その病める感情の核心から押の「榮光」と「愛」とを求めるために祈祷してゐる人間であります。

凡ての苦痛、凡ての罪惡、凡ての疾患、凡ての特異な現象、此等いつさいの現実に対して大股にしかも絶大の忍従を以て面接してゐたいのであります。かりにもそれらの忌はしい「現実」から逃避しようとするやうな態度は私の卑怯として嫌ふ所です。

(「ノート六」)

どこの子どもらですかあの璽珞をつけた子は

《そんなことでだまされてはいけない

ちがつた空間にはいろいろちがつたものがある

それにだいいちさつきからの考へやうが

まるで銅版のやうなのに気がつかないか》

雨のなかでひばりが鳴いてゐるのです

あなたがたは赤い瑪瑙の棘でいつばいな野はらも

その貝殻のやうに白くひかり

底の平らな巨きなすあしにふむのでせう

もう決定した そつちへ行くな

これらはみんなただしくない

いま疲れてかたちを更へたおまへの信仰から

発散して酸えたひかりの澱だ

ちひさな自分を劃ることのできない

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんとひとと萬象といつしよに

至上福祉にいたらうとする

それをある宗教情操とするならば

そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする
この変態を恋愛といふ
そしてどこまでもその方向では
決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を
むりにもごまかし求め得やうとする
この傾向を性慾といふ
すべてこれら漸移のなかのさまざまな過程に従つて
さまざまな眼に見えまた見えない生物の種類がある
この命題は可逆的にもまた正しく
わたくしにはあんまり恐ろしいことだ
けれどもいくら恐ろしいといつても
それがほんたうならしかたない
さあはつきり眼をあいてたれにも見え
明確に物理学の法則にしたがふ
これら実在の現象のなかから
あたらしくまつすぐに起て

(「小岩井農場 パート九」)

朔太郎がキリスト教的な語彙を用い、賢治は仏教的な語彙を用い表現している違いはあるにしても、両者が、自己の〈病む心〉を見つめ、さらにその奥に、宗教的本質の存在を認めようとしている点、共通しているように思う。

五 〈病む心〉の回復

朔太郎も賢治も、次第に一時期の病的状態から回復していったと考えられる。詩風の変化がそれを確実に物語っている。朔太郎の場合なら『月に吠える』、賢治の場合なら『春と修羅』第一集に、病的な神経のピークがある。つまり、最初の詩集にもっとも病的な素材が見出され、それ以後の詩集からは病的な素材が見出しにくくなっているといえるだろう。賢治の晩年に「疾中篇」と呼ばれる詩篇があるが、それは、肺結核という肉体上の病を得たときの作品であり、そこに狂気への不安を見出すことはない。朔太郎の場合も、神経的な疾患を詩の背後に感じさせるのは『青猫』『蝶を夢む』あたりまで

であろう。

*

これまで朔太郎と賢治の間に、〈影意識〉とでも呼ぶべき共通性のあることを述べ、その背後に病的な神経や宗教的思想の存在することを指摘した。ただ、〈影意識〉が地学的過去と結びつくことは賢治独自のもので、朔太郎との関わりはない。

最後に、二人には〈ありあけ〉という共通する題の詩があることを指摘し、宗教詩人として在することをあえて拒否した観のある朔太郎と、宗教詩人として存するしか生きえない賢治との、おのずから生ずる詩人としての差異を知る手がかりとして提示したい。

ありあけ

『月に吠える』

ながい疾患のいたみから、
その顔はくもの巣だらけとなり、
腰からしたは影のやうに消えてしまひ、
腰からうへには藪が生え、
手が腐れ
からだ
身體いちめんがじつにめちやくちやなり、
ああ、けふも月が出で、
有明の月が空に出で、
そのぼんぼりのやうなうすらあかりで、
畸形の白犬が吠えてゐる。
しのめちかく、
さみしい道路の方で吠える犬だよ。

有明

『春と修羅』（第一集）

起伏の雪は
あかるい桃の漿をそそがれ
青ぞらにとけのこる月は
やさしく天に咽喉を鳴らし
もいちど散乱のひかりを呑む
ハラサムギャテイ ボージュ ソハカ
(波羅僧羯諦 菩提 薩婆訶)

付記

本稿は「宮沢賢治文学における地学的想像力」というテーマの下に企画された、連作論文の一つである。これまで、(一)「基礎編・珪化木 (I) 及び瑪瑙」(「文学部紀要」文教大学文学部第21-2号)、(二)「基礎編・珪化木 (II)」(「言語文化」第20号、文教大学言語文化研究所)、(三)「基礎編・〈まごい淵〉と〈豊沢川の石〉」(「注文の多い土佐料理店」第12号、高知大学宮沢賢治研究会)、(四)「応用編・檜ノ木大学士と蛋白石、発展編・ジャータカと地学」、(五)「応用編：修羅意識と中生代白亜紀」(「文学部紀要」文教大学文学部第22-2号)として、発表している。

(了)
(本学教授)